

<書評>

『中国ガン：台湾人医師の処方箋』（並木書房）

林建良著

英訳版：「史実を世界に発信する会」発行

書評：タダシ・ハマ（日本語訳：「史実を世界に発信する会」）

アドルフ・ヒトラーはユダヤ人に「黴菌持ち」というレッテルを貼った。クメール・ルージュは敵を「社会と党と軍を腐敗させる病原菌」と呼んで殺戮し、国民の浄化と肅正を図った。ニューギニアに駐屯していた日本軍について、オーストラリアの将軍トマス・ブレイミー卿は、一九四三年に部下の兵士たちに向かって、「諸君が生き残り、諸君の家族が生き残るためには、こういう害虫を駆除しなければならない」と述べた。「国民」・「我が民族」の生存を脅かす疫病が見つかった場合には、徹底的にその絶滅を図らないわけには行かないのだ。

著者林建良は、中国共産党(CCP)を病原菌に例えて、「人類の生存を脅かす癌」と呼んでいる。林は、中国共産党(CCP)がどのようにして多くの国々の政治・経済・教育の分野に静かに浸透しているかを見事に描き出してくれる。さらに、林は、中国共産党(CCP)が基本的な環境保護の問題を露骨に軽視していることを指摘している。そのために、産業廃棄物が垂れ流しになって、近隣諸国の環境を甚だしく汚染しているのである。中国は毒素の混入した商品を輸出している——林は中国共産党が中南米で、麻薬売買に手を染めていることまでほめかしているようだ。その目的は、道徳的・肉体的に「帝国主義の走狗」の力を弱め、同時に経済に打撃を与えてやろうということである。¹

従来、極端な人々は敵を見れば撲滅するしか仕方がないという態度を取っていたものだが、林は「中国のガン」を組織的に治療すべきだと述べる。強引な外科手術や、化学療法のような照準の定まらない治療をしていたら、数え切れないほどの中国人の生命を犠牲にしてしまう可能性がある。林は免疫療法を推奨する。ガン細胞と戦う体内の免疫システムを利用する治療法のことを言っているようだ。具体的には、中国共産党(CCP)に反対する市民を糾合しようというもので、チベット、ウイグル、法輪功、さらには国内ばかりでなく外国に居住する反体制派をも含めることになる。特に台湾は独立国家なので、中国のガン細胞に免疫療法を施す際には、中核的な役割を果たしてくれそう。林は、中国を民主化するには、五つの地域に権限が移譲されるべきだと示唆する。それはすでに存在している軍

¹ H・マッケイ（2020年11月12日） 「メキシコで暗躍する中国の『カルテル』が米国のドラッグ問題を助長している」

<https://www.foxnews.com/world/chinese-cartels-mexico-us-drug-crisis>; Jorgic, D. (Dec. 3, 2020).

Special report burner phones and banking apps: メキシコのドラッグマネーをロンダリングする中国の「ブローカー」に会う。

<https://www.reuters.com/article/us-mexico-china-cartels-specialreport/special-report-burner-phones-and-banking-apps-meet-the-chinese-brokers-launders-mexican-drug-money-idUSKBN28D1M4>

管区のことであり、そのそれぞれに、軍事・経済・政治的なインフラを持たせるというものである。さもないと、中国全体が崩壊し、その結果、大量の難民が流出することになる。人道的な大問題に発展することになると林は憂慮する。中国はエリートの意志ではなく、人民の意志によって、新しい政府を樹立しなければならないのである。

中国共産党(CCP)に反対する国内・国外の運動を支援する勢力は世界中の国に広がっている。それが存在しないのは日本だけである。林の分析によると、日本人が積極的な支援をしようとするのは、この国特有の「中国を刺戟してはいけない」という考え方のせいである。林は、日本こそが中国民主化のリーダーシップを取るべきだと主張するが、この点で日本が適正な努力をしているとは思われない。現に、日本政府はのびのびになっていた習近平国家主席との日本での首脳会談を開催に漕ぎ着けようとして躍起になっている。最近王毅外相が訪日した時、日本側は中国漁船が尖閣列島近辺の領海を侵犯していることについて議題に載せることすらしなかった。菅首相は前首相（安倍）の盟友であっただけに、その政権は中国に対して強い態度を取れそうにはない。まして、民主化推進を要求するなどは口が裂けても言い出せまい。日本の現政権に、中国共産党(CCP)に積極的な対抗策を取らせるためにはどうしたらよいのだろうか。皆目五里霧中の中としか言いようがあるまい。

林は、現実にはガンを扱う外科医の中にも、「静観」の態度を取る人がいると指摘する。そのうちにガン細胞が消滅するだろうという楽観論である。こういう考え方を適用すると、中国も、いずれかの時点で自力で成長して、それなりに民主化し、遵法国家に変貌するだろうということになる。外科医の役割を果たせそうな国は日本だけなのに、その日本がしっかりしたリーダーシップをまったく発揮してくれないのだから、中国の国民はいつまでも不必要な苦しみを味わわなければならないのである。

*中国ガン（並木書房）：<https://www.amazon.co.jp/dp/4890633006>

*The China Cancer

Kindle: <https://www.amazon.co.jp/dp/B08JH6L9Z4/>

On-demand paperback: <https://www.amazon.co.jp/dp/4867280046/>